



国立国会図書館 傾城買談三部集 3巻 208-33



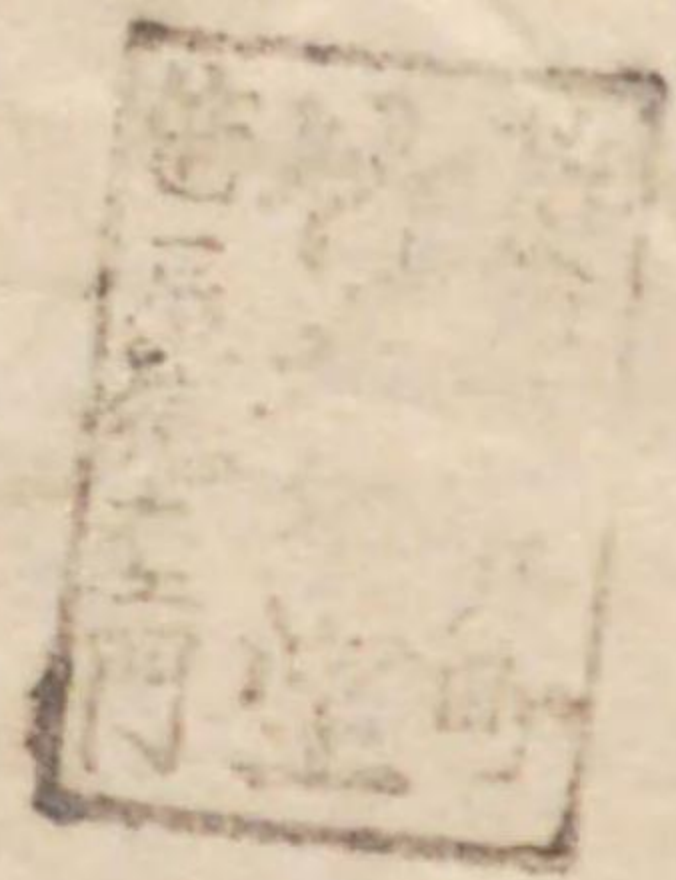
ガラス使用

傾城買談

三部集

下

208
33



^{あめつちゆき} ^{たまご} ^{ういびやく} ^{たまご}
 叙 ^{たまご} 未 産 傷 外 産 ざり 時
 信 託 たる 産 卵 の 開 辟 とも あり
 り 来 本 ン 物 ぞ 四 角 有 卵 の あり
 妻 子 を 以 方 壽 しく 養 育 せ ば 子 孫 繁 栄 する



あわらぎ さつろびろ 玉の肉 うち 宿 あで
伸 まん 途 ど におめを いちや 一夜 や 宿
角 かく 形 かたち 卵 たまご の たまご 形 かたち
中 ちゆう を ま 以 もち 多 た 分 ぶん 良 りやう 牙 が 著 ちゆう
其 その 一 いち 部 ぶ を く 定 ぢやう する す 亦 また 紫 むらさ 煙 えん ぬ ぬ め め ぬ

角一

あ あ を を 懐 なつ ぬ ぬ あ あ た た 欠 け て て い い 懐 なつ 疑 ぎ に に
分 ぶん 去 く 城 じやう 却 くつ ち ち へ へ 入 い り り け け ち ち 入 い り り ぬ ぬ
玉 たま 子 ご の の 美 み き き を を 毛 け 門 もん と と 入 い り り ぬ ぬ
取 と り り ぬ ぬ 玉 たま を を 実 じつ ぬ ぬ 其 その 紫 むらさ 煙 えん の の
浴 ゆ 全 ぜん たる たる こと こと を を い い ち ち を を あ あ り り 疑 ぎ

たまごありさ
 卵の原を誌其情の起すを
 うぐち
 窠もやハ大^た白入^り丸湯卵の如し
 予も^{このまじ}巻を^{あぢい}味を^りよりおき
 えん^ん寒卵^{たまご}と^りむと^りに^た長^た枝
 まう^ま西子^ごゆ^りに^か内東^り越^り向^り唐^り

南序二

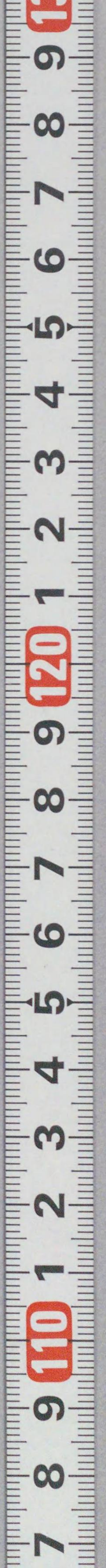
し^ぢ序^り未^りア、^{けい}鷄^{せい}群^{ぐん}に^か所^りを
 あら^りア^りち^す

甲序の妻

蒼山道人



角亭三



目録

角鶏卵の契約
のちよ
の夜の手紙
読後内容情

角亭四

甲驛
妓説

角鶏卵

月亭可於編
蒼山道人閑

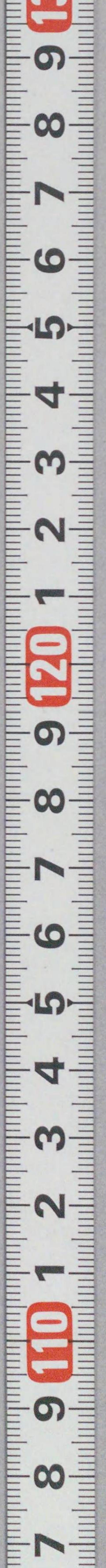
角鶏卵の契約

謙倉御所の西に傍る一蒼街あり号て
是を内東宿と唱中出の頃此所と閑し
と重年く月くは繁栄しく月く夜く小

遊客の會る事北郭南駅巽里小ちおこ
 く芳々次春の美咲は名を雪気僅に
 冬の日ハ坪の内の寒詣は祖師菩薩と名題
 了きい家にあそんで二夜の歡樂千金をぬ
 南一斤の契りては後夜成約しとさぬくも
 別を成備む夫駅中の朝景色を見ま八月を
 鳴子に高敷く空落く物三光院の林は啼く霜
 瓦庇りぬく天願寺の平且隣ゴクとて

麻志を客の耳と費き題字の本魚の者
 ボクくどく酔倒を夫の胸は音くみ
 て帰るが山のはる風強後まぎをの操節の
 一調子上り呻と物さく還る交代侍のそり
 衣氣の物より小聲く咽く廣袖者と通人
 あま細帯のけの艶客あま千差万別さぬく小
 軒窓並べし娼家の中一二を争ふ國佐を
 の興二階は嬢の客

榮之助
 年の比は五にがこむしつ
 ていせなれり男本坊



を城の茶トぬの好職居つむぎの上裏のぬいぐ袴のまふさいめん
ト差ふりき袴のちを言とべら白のまめてお方のトハなるへ
床の上小のぐくき三味せんをれびきかすくさう府のめの中を
とめて居るとば奈奈イ育がけりまこく希の女中

お梅 年ハ十八九まや中しよく肩しりかすりありて供方敷付
いさやうの角はあきも中うの板メちりめんの相違は
ちりめんがのこるうとりむくまきまおまをにひんをさく
山の中中着とあどけなくむまび鬼面の火をちん純子さけ
皇紙のくわきまをくめりまを妹脊りわうでままおま
何うんぐてりる梅子

をかき終庭のけうをるはいも林のくくまも
こま後ぬ人を今さらにはさくぬ別の志事ど
もト度中くこのお
わりちりめま

お梅

うりつりしてはる奥この
とんびつそくそ款上 七レエ

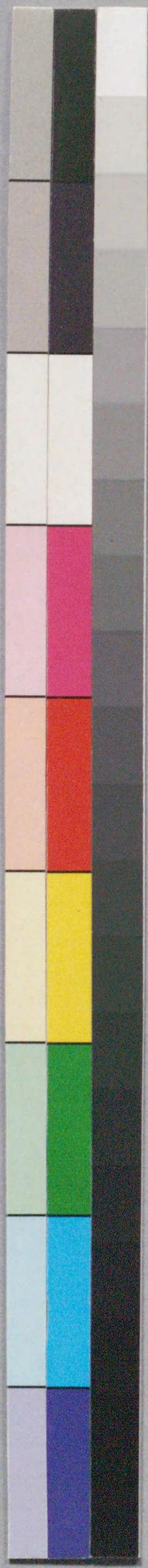
角 二

心といふめのいあつなめんど。十年も母を
されたの事をとおのつりまひ二のあま年
るていあとのる焚うんぐ入り。はらういりあひ
どーうういりくな事をあふめんだ。そまに
この五六日のおめさんのあーはらふーくま
あつく志んふあさいぐばうりいるよ。夕アもお細
さんやお娘さんがいふも。お梅さんの志の懐き
「奈さんが来かきるとりりそりそくーるおん

そのや、あつが孫へおまじがひくまうとけく
るよふやあーまきくへぬくだがあつやと
利ふおあるはあつがひと比ひあつぐへいさあ
かー親ちや中も養くわ分か城じやうのけさう今あつま
こーかんがへてまう。それふむあつとほろ
跡わさうむつろーまむつろーやうりさきん
哉志くらのさう何どいつてもあるとさあ
のサお梅めいそのや、ねー斗とと志や、孫へさく

第五

まかざる客人きやくにんふ是これの女に席せき久くふいく金と。
の及およおひくまなま客きやくにんの一人ひとりもあつ
さ。おめさんおめさんが月つきてもお合あ乃のりりい時ときも
あつがそんなあつらうふ志孫むすぐまで
らんあつへおんあつら城じやうあつらあつら風の
女におんあつらあつらあつらあつらあつらあつら
が。あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら
あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら



とうもろもんど **お栂** 糸が糸をながめ
お月あらし うもー
 ぐうせをいつてふんひね ヨリト栂の下へをせこん
りていよせ
 かふおのせく トカカをふか
たかめ なるさ
 せつから お栂 糸 おんなる
おりの なるふり
 するの お栂 ぎふ おんなる
おりの なるふり
 上ふく お栂 と おんなる
おりの なるふり
 ちつ お栂 と おんなる
おりの なるふり
 かり お栂 の時 おんなる
おりの なるふり

角八

馬中刺小来る あめ
うり 物賣

かりいよ おんなる
おりの なるふり

後夜の子管

送 おんなる
おりの なるふり
 たいむ おんなる
おりの なるふり
 も おんなる
おりの なるふり
 禮 おんなる
おりの なるふり

唄く来白三人連 **毒安為** コツいぢも志ね
 聲でよせへぐんのもりの女連のほらよ
 ごーやがる **あ** けはぐ **郭内** 高中の女を迷せ
 よふといふの **あす** あまきまら。 **急** ぐまも
 むつら **あ** せむ。 **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく
 ねはり **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく
 その **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく
 附く **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく

角九

ぢやア女房と女の出さるい **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく
 梅田屋の女づいづも **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく
 男い **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく
 ちりこの虎 **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく
 女 **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく
 ほん **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく
 い **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく
 は **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく **あ** らく

やつとふとアト見やりのの斗りある中かど
 ぐらるや月があるどやアろろ安今時分
 ゆるやつい店ものス毎店もの四角小女界
 の実があきび三十月小月があるツサ。おま
 ろろ安ひとりで参てるろろいひる時小
 今幾いど久く毒横丁いぐい安
 てきあが所ろろまぶつろろやア一孫ろろ毒
 うめさんろろおろろはあろろくト上の方へ
 りる

浦
 十

跡をまよえいのスばまを城のねん
 さんといまの布子さる平の男
 源公いどよー
 ち坊小まい足び
 りどあで。おろろやもあま孫へやこもく
 魚い獅子ひつろろつろろ首を物。おやーの
 まよめで笛を吹△
 小やろろせト
 国信登ハあろろちろろでござりまは○
 どござく重さんまあ孫さんでいちび

女サくおわぐんあさしまし凍えんのおまへ
 いのちいましよ△△とまのちりくして
 さりたりと後をくなくなふよあては
 十カふべんりサ、先へよりく△△
小波荒ぐのの海わりのまのちりく
おまのちりく 金コウ 日く荒
 ちよつとれまやと若者く金あのお補
 さんといふ女郎ちりく荒のとくく百条といふごん
 やまゝいゝるゝ若がまゝいゝるゝ若いまま

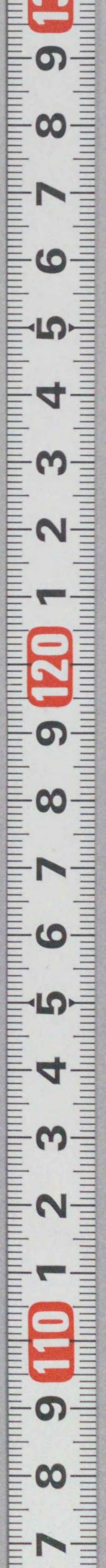
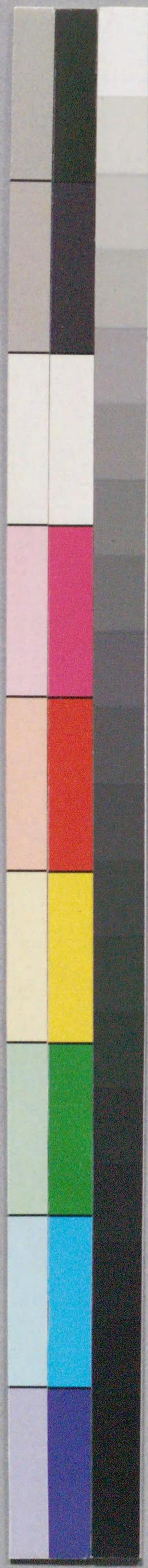
角土

金金そんならのだまうをあひてへとつてせ度へ
 きくゝいとちよゝらよびおしとらんが
 若若ぐりしとゆりまゝいゝと
ニ階へよりお梯がなを
のせしとて初月ふあけ
 モシ 桑さんく若づねど加助どんりなんど
 若若い土桑さんふお月ふかやしてへとつてど
 ちのりませまゝいゝおまのちりく桑お
 いふおあてへとどんな人ぐ若おあさん若い
 のせりゝとゞりしお若いひまゝ

まきもめがうこのひびざんやうにへう。
そんなにもいふ息なる氣がまを備へ
を候したとて女郎はさもあるがひた
ぬぐけさ息とつりてそのやんひさる
もんも備へときやあへのおとつさんの
中判でかゝるとかやあとのめが取
らせよふ肉へはと経ぐくして押ても
のいん判ふちがはへ後へあとのめが

海
話

吐く息へを仕よふたり後くトまきもめ
モしくいふ状うぞんとあせんがそんな
そのまてあつたやうぞとあつたりとあ
くございまたをまにみせ先づく人き
目るふございまはうら轉ふたあつて
ま—**お梅** おあつたまのうら お梅さん こんが
おこづそんなふいひなるとこより
二階へいづくおえな—息へを—かせい



を志よといひてりてみゆふにぞいと枝
さうちや氣のどくどくお柳まのどくどく
のと他人が雨ふぬ一の為よまるぬん
乃をぞんまふなとしておうらまへ
お月ふこんなま事をなめふくうらまへ
本意でも移へが雨あとにこまふらう
ぶどよそを面をしてきてらやお柳
が苗といふの半返りききき月志
宗悦

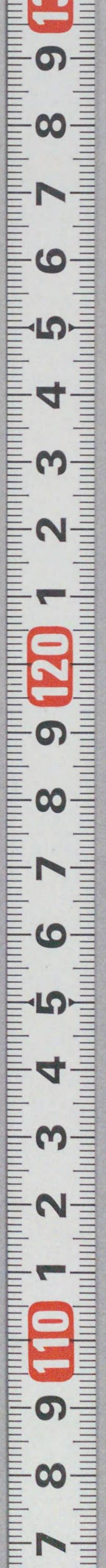
前 十八

かゆりりるうら来さ月志方忠さん
内へふこでも月志方忠さん
志方とむんをりておまよふ
に氣ふやとなさんナト若者
お柳さんちよ月と下へ今山城
忠さんお出なせりてりての
お柳 志方さんのきききとほん
若 いまいろうやちぢぢぢ

ぞあぐごぶんまたキトおたじめなるまー
 忠まごしきのごぶんと酔しヨトしひかきてたのん
 先と一及び作まごへさる代あつごさ
 や志まごや。志まごりー羊まご及びちとお様まごなるまご
まごをまごけるまご志まごぐくまごありまごちまごままごぐまごきまご
まごるまご羊まごありまご 深まご吉まご益まごをまごくまごけまごくまご モまご忠まごさんまごあまごままごままご
 ぐくまごちまごままごせまごくまご 忠まごしまごおまごままご入まごよまごふまごうまご深まご 深まごくまご
 おあまごぐまごんまごままごふまごままごーまご忠まごかまごままご長まごのまご眞まご
 じまごあまごるまごとまごしまごよまごどまごのまごふまご志まごあまごくまご 長まごしまごもまごほまご

前
 後

の志へまへ女の事ささお扱へり男が
 や志まごやまご 深まごコまご侍まごをまごんまごれまごままご女まごのまご志まごとまごままごらまご
 けりまご我まごこまごあまごをまごしまごなまごさんまごれまご 長まごセまごマまごやまごくまご久まご前まご
 へまごままごせまごくまごちまご致まごしてまごままごよまご 深まご小まごしまごいまごままごいまご 代まご
 くまごちまごびまごごまごとまごあまごままごびまご二まご階まごくまごらまごままご林まごくまごりまごちまごとまご物まご
 いうまご長まごあまごるまごいまごよりまごやまご 又まごくまごらまご社まご 忠まごこまご長まご九まごきまご
 公まごをまごけまごしまご十月まご小まごおまご囀まご場まごぐまごみまごくまごけまごくまご若まご念まごなまご
 花まごままごぐまごあまごりまごとまごくまごらまご接まごをまごけまごんまごじまごごまご



内小ぶぶを男にたぶめての女とりあひて
見さむがむまあつこやなぶぶとんあよ
べ秘へるむごうらとりりくユ史を中る内
その近カ小由あといふさき量かたん顔
う累うたかの二代月うといふよあ女があらから
あまのよまもや男にあひて妻へあるゆい
とその女とかけ合ふがさうとくあつち兼
志ていつ幾日れをんと約束をして

角 七二

晩は成て出合く見さむがとりあひてあん
なへどぶも秘そのよまも秘へるよめ
く我はづめてあふとあつこ初てぶあ
そよぶといふと女がたねいよんよあひあ
よほおまやがれ忠ちゆうどなひなげらるる
ふふ時ときに静高貴をちと男に
しして三弦さんぜんを出すとしは法よ志中じや後
りトりはは縁縁存存ががんんごご代代ががりりややれれ長長九九ががたたいいここううくく有有
てのちちはは志志ののここううははかかいいささよよををししととささりりけけいいままああく

とつていとおどやうも後へ^{お梅}せんを
ぶが子あいそ成はうなさんま^{お梅}ら
まづうい^{お忠}なんがおりりくも後^{お梅}
ア子^{お忠}せんよりりうぬふもお目ふけ
それよりちがあま^{お梅}いたいまのかん
ざーと午^{お忠}子ア代をやう後へ^{お梅}おい^{お忠}がまき
のふと^{お忠}あせひをふはり^{お梅}をねいれ
どちつと^{お忠}いあさるとまの^{お梅}おつ^{お忠}さんの方の

角 共六

まづ月やのぞき^{お忠}お合がま^{お梅}おつ^{お忠}あつと
ゆくと^{お忠}其と^{お梅}れのおな^{お忠}種へ^{お梅}あまほし
くふ^{お忠}をそれ^{お梅}あつち^{お忠}あまの^{お梅}い
な^{お忠}忠^{お梅}を^{お忠}おん^{お梅}れ^{お忠}ま^{お梅}あ^{お忠}ま^{お梅}く^{お忠}ま^{お梅}い^{お忠}は
い^{お忠}そ^{お梅}て^{お忠}ま^{お梅}金^{お忠}とい^{お梅}い^{お忠}け^{お梅}り^{お忠}ま^{お梅}い^{お忠}ら^{お梅}
おめ^{お忠}さん^{お梅}が^{お忠}そ^{お梅}ん^{お忠}な^{お梅}ん^{お忠}切^{お梅}り^{お忠}ま^{お梅}お^{お忠}ん
あ^{お忠}さ^{お梅}り^{お忠}種^{お梅}より^{お忠}あ^{お梅}や^{お忠}あ^{お梅}ん^{お忠}ふ^{お梅}身^{お忠}成^{お梅}ま^{お忠}い^{お梅}ら^{お忠}ま^{お梅}い^{お忠}ら
よ^{お忠}り^{お梅}は^{お忠}い^{お梅}ひ^{お忠}が^{お梅}ま^{お忠}ほ^{お梅}く^{お忠}べ^{お梅}く^{お忠}元^{お梅}の^{お忠}め^{お梅}で^{お忠}小^{お梅}回^{お忠}物^{お梅}

登ふりあくなまきりわれくばぬんづる
 くつとやうらうらくすら移るが
 う中もむりなほむん哉りく又こんな
 りの哉おひやちあひのうらひなま
 それがをづういまな忠な人と思ふも
 ちうそしていら申ごといらのふお梅
 梅とその外はあつとのこりぐまうら何うで
 二めあまむづうが子忠二両う大いあるく

角七

あふと 義紙袋とうてカチヨロの
 今入より小粒のうりやい サアト 紙と包て
 わん
 お梅 まことんおありがふござりゆはをを
 おくろく見えほけくあう忠あへよん
 であらへづいのふお梅 商人へ二階へよるこた
 せりゆせんうらさふ三人をまびまわがうて
 くらいつりちや移へよは金枝鳥へあつ附く
 ありート 懐へる
 岸上者
 不寐番がハツの柏子木
 カツ
 手くく
 カツチク

7 8 9 110 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

曉鐘の實情
雞鳴乃鐘撞終く 呷空中小消按摩乃笛
の音嵐は誘きく 幽なり蒼変宜哉乃
聲暫絶く 犬の遠吼遠近し 闌や空
用心慎ませし 此破休軒下小響くいと
寂莫く 百下座爰の毎妓圍六 祭隣り
部唇の責残娼り 高軒耳りささりく
寐らもせん 火跡は向く 生教くさる

相 伏 八

そのおろく 障子ををりし 遠く 遠く 遠く 遠く
祭さんおさみ ありあり ありあり ありあり ありあり
まががある こそ ありあり ありあり ありあり ありあり
紙を コリヤ ありあり ありあり ありあり ありあり
で合がめ人の ありあり ありあり ありあり ありあり
の勤の ありあり ありあり ありあり ありあり
るごご ありあり ありあり ありあり ありあり
ま後よよ ありあり ありあり ありあり ありあり

や、^{マツル}よりいふ筒つづみど、^{たい}おつちも大妻おほつまよきまが
 いしきいしき後へく **お栞** ^{おま}お栞おまがりのまゝなるまゝ
 いちやア、^{おま}もいふ久 **祭** ^{おま}お栞おまがらもよきまが
 ちいげつちいげつかおとくいぬいぬごうごうさ **お栞**^{おま}
 木の事木の事でて、^{おま}もいふ久 **祭** ^{おま}お栞おまがらもよきまが
 袖そでへうへうごごであつとやままあてあてえんえんなせ
ト、おまのまゝにぬゝもそんな形をうていしきへぐ
 ほんごうほんごうお栞おまなせへへナトナトをのをのとと栞栞のの肩かた

角 平

へうへうがが魚うしりりささむむいい糸いと **祭** ^{おま}お栞おまののととここああ
 へへよりよりやや **お栞** ^{おま}お栞おまののととここああ
是々おまのまゝにたんまりのいしきをせしめ
 ぬゝもそんな形をうていしきへぐ **祭** ^{おま}お栞おまののととここああ
お栞 ^{おま}お栞おまののととここああ
ト、おまのまゝにたんまりのいしきをせしめ
 ぬゝもそんな形をうていしきへぐ **祭** ^{おま}お栞おまののととここああ
祭 ^{おま}お栞おまののととここああ
 全ぜんさんさんととああららにによよくくたたののんんででままををううてておおととらら
 さんさんへへああままををおおよよううににななよよ **祭** ^{おま}お栞おまののととここああ
お栞 ^{おま}お栞おまののととここああ

かあどぼりこくなと我も後で涙の不
 をまのくもふい上 **茶** 志あうちごよトひく
お梅 加助どんく 茶さんがかつう志書よ
若イ者 毎て飛りしう乾て
月をすりちがら いくまごどんごあえよ
おぼん 身トひなまらまきと申ては
 世話く **若イ者** 又おちうい内ふトくり
お梅 茶さんく **茶** ちゃんご **お梅** モウ一
 魚をこせりつくとんな

角 三十一

其二
 下街の外行側ふち **茶** と書する
 方控這入口は羅く **茶** 枝照ら辰朝
 帰の客あふ来とく足をもむ就中又お
 とり茶店 **茶** 張袋喰双あり香む
 徒あり思ひくふ腹を申あふそが中ふ奥
 の二間は只獨り交結る旨のふめい
 園作屋へ来りし **金** ちりりし書せ
いとど飲て茶 **茶** 門口の奥とまへ
て奥の茶袋香

去てとコウの事なるかんぢ申ふ久まにりて
 申に申せし亭より一はびりませ三入
 伊おせりト申をぞクライたのおせめんどうな
 づらわけは二てしおしくんか駕籠やの店
 おこハナクトわがぶおとまよコウ久次やしくわけ
 が二てしでらア松や助次をおこしくんか
 久次ライクトおきく相違とよびありほとあかめとが
 けかこぢあがモレと取どくやりおんか
 祭

角三十三

増元へやいしくんか駕かこ浦のま〜
ト杖をもちし清のるハナクト

是より此二個の俠客増元いり〜の世界
 且國佐屋の娼おぢなるこの此字を知て
 祭法と申ふまじども祭ひとりの計と申す
 是を防の二條草橋山々来あきとて丁敷の
 おぢ成厭ひと下あつ爰みとて祭成

208
33

とどろく余の後編ふゆばり侍り也

角鶏卵後編

葛と浦造神

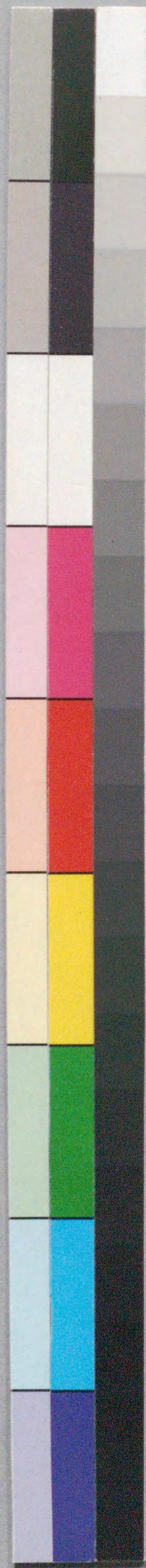
完

追々や板の時を待つてありとる
所見たりとる

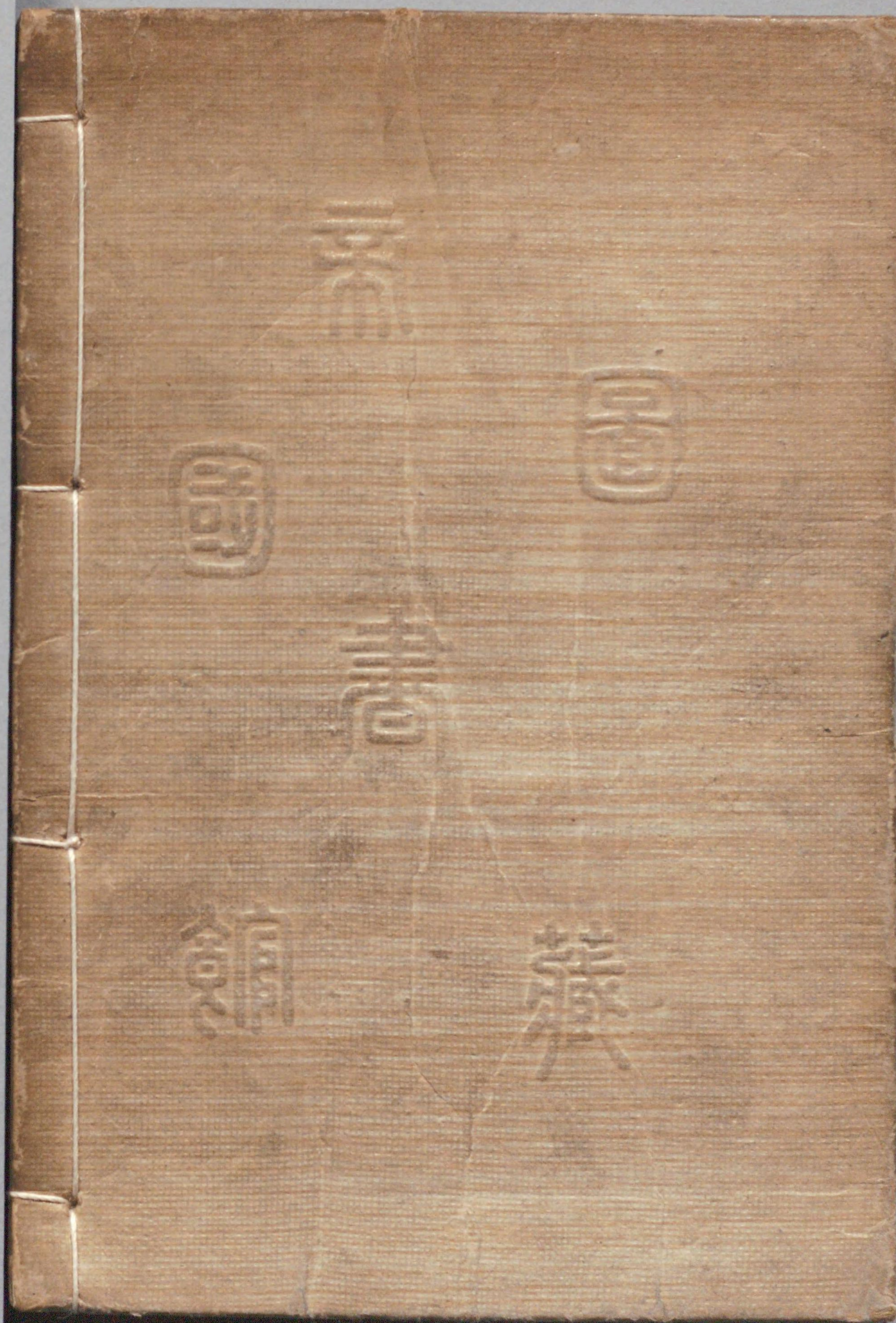
角三

208
3
33

7 8 9 110 1 2 3 4 5 6 7 8 9 120 1 2 3 4 5 6 7 8 9 11



国立国会図書館 傾城買談三部集 3巻 208-33



ガラス使用

